

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 研究論文

### 日本の「新宗教運動=文化」研究の課題と展望

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 塚田, 穂高 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00001726">https://doi.org/10.57529/00001726</a>

## 日本の〈新宗教運動Ⅱ文化〉研究の課題と展望

塚田 穂高

### はじめに

日本文化のなかの宗教文化<sup>〔1〕</sup>を考える際に、神道文化、仏教文化、あるいはキリスト教文化と言うのは、程度の差こそあれそれぞれイメージしやすいだろう。あるいは、世界の諸宗教文化のなかにおいて、ユダヤ文化、イスラーム文化、ヒンドゥー文化などというのも、もちろんその範囲や表象についての議論はあろうが、一応は想定することができよう。では、「新宗教文化」はどうであろう。違和感がある語に響くだろうか。

「新宗教」の定義と範囲についてはさまざまな議論があるが、本稿では宗教社会学者の西山茂による「既存の宗教様式とは相対的に区別された新たな宗教様式の樹立と普及によって、急激な社会変動化の人間と社会の矛盾を解決または補償しようとする、一九世紀なかば以降に世界各地で台頭してきた民衆主体の非制度的な成立宗教」という定義

に従っておく。<sup>2</sup>すなわちそれは、近代化に応答する形で新たに発生・伸長した民衆的宗教運動、という時代的概念である。ならばやはり、ある特定の時代に一時的に新しく見えた、時間が経てば旧来の「宗教文化」に吸収されてしまうようなものであって、「新宗教文化」などと括弧することはなじまないのだろうか。

もう少し、現代日本の宗教文化の実態に即して考えてみよう。例えば、高校の日本史の教科書の多くには、幕末・維新期の文化史の一端に、黒住教―黒住宗忠、天理教―中山みき、金光教―赤沢文治などの記載がある。また、戦後の政党政治史の箇所に公明党とその母体である創価学会の記載もある。<sup>3</sup>高校日本史を履修した多くの学生が、そうした「新宗教」についての断片的な知識に触れるのである。それだけではない。例えば、高校野球における天理高校、PL学園高校、智辯学園・智辯和歌山高校、創価高校など。あるいは天理大学や創価大学も国内私学の中では一定の位置を占めている。街中でも、新宗教の施設は数多い。天理教の分教会や布教所などは無い自治体を探す方が難しいほどだろう。天理教の天理市、金光教の旧・金光町（現・浅口市）はもちろん、創価学会の信濃町や真如苑の立川、大山祇命神示教会の蒔田など宗教タウンと化しているような例もある。各教団の本部施設・建築等も日本の近代建築史上では独特の位置を占めている。<sup>4</sup>テレビやラジオCM、新聞・雑誌の広告などでも新宗教関係のものは枚挙に暇がない。電車内で創価学会や幸福の科学、ワールドメイト関連の書籍広告を見かけることも多く、日本の出版文化の一角を占めている。幸福の科学製作の映画も特異な評判を集めているよう。熱海の世界救世教のMOA美術館、甲賀の神慈秀明会のMIHOMUSEUMなども、日本美術界の中では独特な位置にある。政治においては、創価学会―公明党の存在は言うまでもなく重く、新宗教の連合体である新日本宗教団体連合会（新宗連）などの動向も注目を集めている。また、新宗教が特に注目を集めるのが、その街頭などでの布教・勧誘行為である。それが、イメージの上で「あぶなさ」「あやしさ」「金儲け」などと不可避的に連結している。そして、その一つの極にあるのが、オウム真理教と

その事件に代表されるいわゆる「カルト問題」（実際は新宗教に限られたものではないにもかかわらず）なのである。

このように見てくると、確かに神道文化や仏教文化などとはずいぶんと違ったかたちではありながらも、そして一定のネガティブイメージなどは孕みつつも、日本文化とその宗教文化の一角に、新宗教運動とそれに起因し関連する文化が現実幅広く息づいているという指摘ができるのではないだろうか。そしてそれは、時間とともに神道文化なり仏教文化なりのなかに包摂されてしまいかと言えば、そのようには言えないように思う。よって、それらを〈新宗教運動＝文化〉と捉え、それについての考究を通じて、日本の宗教文化ならびに日本文化の研究に寄与することも大いにあるだろう、というのが本稿の基本姿勢である。

日本の〈新宗教運動＝文化〉を論じる際に、そのおよそ二〇〇年間の歴史をなぞり、またそれについての学術研究を全てレビューすることはできない。すでに一九九〇年時点での集大成として『新宗教事典』があるため、多くはそれを参照すればよいのである。<sup>5)</sup>

同事典の「新宗教の展開」の節には、その通史的記述と言える「時代ごとの特徴」の項がある。だがそれは、一九九〇年の刊行であるために、「第六期第一次石油危機―昭和末年〈豊かな社会〉での新展開」として、神秘・呪術ブームのなかの、後述するような一九七〇年代半ば以降に発展したとされる「新新宗教」や「小さな神々」の流行現象などの記述までで終わっている。<sup>6)</sup>

それから四半世紀が経った現在、その通史の「その後」は、どのように記述しうるだろうか。本稿で焦点化し論じたいのは、まさにそれであり、それはとりもなおさず〈新宗教運動＝文化〉の現況を取り扱うこととなる。そのためには、①従来の「旧」新宗教<sup>7)</sup>がその後どう展開したか、②「新新宗教」とされた運動群がその後どう展開したか、③その後どのような新たな運動が発生・伸長したか、を腑分けして見ていく必要があるだろう。

以下、本稿では、〈新宗教運動Ⅱ文化〉の実態とその研究動向の双方に目配りをしながら、この順に論じていく。そうした議論を経て、日本の〈新宗教運動Ⅱ文化〉とその研究の現在と今後の展開について考察し、展望を示そうというのが本稿の目指すところである。

## 一、「旧」新宗教運動の動向とその課題

日本の新宗教運動は、その教勢を拡大させているのだろうか。「新宗教」と言えば、どれも巨大な教団で、大量の信者が一方向に統制され、多くのカネを集め、大型の施設を各地に次々と建設して勢力を伸ばしている、といった「幻想」が持たれているケースに遭遇することがままある。が、それはどの程度実態に即しているだろうか。

もつとも、その全体像を正確に捉えられるような枠組みとデータが存在しないという問題も大きい。そもそも「新宗教」とは、前述の通り時代性に即した学術概念と、新しく見える宗教運動への一般的呼称との間を揺れ動く「容れもの」なのであり、その範囲は不明瞭である。法制度上・行政上の用語ではなく、数も確定できない。代表的な事典である『新宗教教団・人物事典』におよそ三四〇の団体が収録されているが、ようやく一つの目安になるくらいである。<sup>8)</sup>

唯一頼りになりそうに見えるのが、文化庁の『宗教年鑑』である。だがこれも、「神道系」「仏教系」「キリスト教系」「諸教」の別にデータを伝えるものの、「新宗教」という区分はなく、「諸教」がそれにそのまま対応するでもない。また、区分ごとの「宗教法人」の数自体は正確に把握されているものの、法人格のない「宗教団体」や、あるいは名乗らないでも実質的にそのような団体であるものの数は捉えようがない。

表1 「旧」新宗教11教団における申告信者数の推移

	1993年	1998年	2003年	2008年	2013年
黒住教 (1814)	295,225	297,130	298,028	298,490	297,545
天理教 (1838)	1,892,498	1,902,470	1,629,399 (↓)	1,211,565 (↓)	1,169,275 (↓)
金光教 (1859)	433,340	430,190	430,190	430,105	430,026
円応教 (1919)	444,348	457,356	463,104	461,504	457,554
PL教団 (1924)	1,234,457	1,131,199 (↓)	1,076,797 (↓)	981,720 (↓)	922,367 (↓)
霊友会 (1928)	3,212,314	1,793,413 (↓)	1,716,227 (↓)	1,518,246 (↓)	1,369,050 (↓)
生長の家 (1930)	872,198	862,507	822,940 (↓)	711,427 (↓)	550,310 (↓)
世界救世教 (1935)	835,756	835,756	835,756	835,756	835,756
立正佼成会 (1938)	6,545,950	5,913,379 (↓)	4,948,062 (↓)	3,791,509 (↓)	3,089,374 (↓)
佛所護念会教団 (1950)	2,240,589	1,672,752 (↓)	1,584,336 (↓)	1,385,172 (↓)	1,214,118 (↓)
妙智會教団 (1950)	1,027,598	1,047,922	1,056,504	853,977 (↓)	660,991 (↓)

※文化庁編『宗教年鑑』の記載データに基づき筆者作成

※教団名の下は立教年 信者数の単位は(人)

※(↓)は5年前より1万人以上の減少があったことを示す

次に「信者数」に注目してみる。『宗教年鑑』には単立宗教法人を除いては、信者数の掲載があるが、これは各教団から申告されたものである。「旧」新宗教のなかでも比較的規模が大きく、歴史があり、一般に「新宗教」として認知されていると思われる一教団について、一九九三年末～二〇一三年末まで五年ごとの信者数の推移を表1にて見ていく。

教団によって差はあるが、軒並み停滞・減少傾向であり、なかには二〇年間で半減というものもある。もちろん、この数値自体が正確だと論じたいのではない。そうではなく、「信者数が停滞・減少していることを申告している」ということ自体を重要視すべきである。これは、原理的には少しでも多くの人びとを救済し、信者会員とすることで発展を遂げ、人類救済・世界救済を

目指すことをその共通特性とする「新宗教」にとっては、かなり衝撃的な告白とも言える。

他方、実質的規模としては国内最大と言える、創価学会の場合はどうだろうか。創価学会は単立宗教法人であるため『宗教年鑑』に信者数の記載はないので、同教団広報室が毎年刊行している『SOKA GAKKAI ANNUAL REPORT』を参照する<sup>10)</sup>。すると、二〇一〇年から二〇一五年まで公称会員数は「八二七万世帯」のままである。この数字も完全に正確とは言えないが、それでも各回の衆議院・参議院選挙における公明党の比例・全国での得票数などを考慮すれば、全くの無意味な数字ではない。ここでも注目したいのは、一千、一万世帯の増減も見られず、変わらないという事態である。これはすなわち、少なくとも数の上で増えていると発信することを止めている、ということだ。さらに深読みするならば、世帯数レベルではほぼ変動が認められず、すなわち世帯内での信仰継承の方に軸足が移っているという事態を想起させるのである。

幕末・維新时期以降、社会の変化にあわせていくつもの発生・伸長の波を経て、とりわけ戦後の高度経済成長期に隆盛を誇った日本の新宗教運動の多くが、ほぼ漸減・停滞状況にある。いったい何が起きているのだろうか。大づかみに言ってしまうえば、「新宗教」という近代適的な組織宗教モデルが不適合を起こしつつあるのだと言えよう。だが、宗教運動自体の問題というよりは、その背景や原因に着目すべきである。そこにはやはり少子高齢化、人口減少、過疎化<sup>11)</sup>といった、後期近代社会の現代日本で目下進行中の社会変動が色濃く影を落としているのである。

そうした状況はひとり新宗教だけの問題ではなく、日本の宗教にとっての共通課題である。それらの研究は緒に付いたばかりであるが、とりわけ新宗教を対象としたものは少ない。そのなかでも、金光教と立正佼成会を対象に過疎・高齢化の問題の実態把握を行った渡辺雅子の研究は貴重であるので、本節の議論の上でも紹介しておきたい<sup>12)</sup>。

渡辺の研究によれば、金光教の場合、全一、五二四教会（二〇一三年七月時点、独立採算制）のうち過疎地域に立

地するのは三〇七(二〇・一%)であり、過疎地域であっても市街地に位置することが多い。ただし、南九州・四国・西中国教区といった関西以西に重心を置く同教団の有力な地盤においては、三割超々四割弱となっている。また、信者数は前掲の通り二〇年で横ばいと申告されているが、教会数は一九八二年の一、六八一件、教師数は一九八五年の四、四一八人をピークに、二〇一一年には一、五五四件・三、九四五人と、なだらかに減ってきている。

立正佼成会の場合<sup>14</sup>、過疎地域に立地する教会道場(本部の統制が強い)は全三三八のうち一六(六・七%)、拠点は三八四中一一(三一・五%)である。教会道場の所在地は都市型で、拠点の所在地も非過疎地域が三分の二だが、実際には布教の包括地域に過疎地域を含んでいる場合が半数以上である。

同研究においては危機的状況までどうかええないものの、限られた人的資源により何とか維持されている状況が伝わってくる。二教団間での差異も認められ、安易な一般化はできない。しかし、日本の新宗教運動のほぼ共通の問題状況を反映していると言える。全国津々浦々まで教会・分教会・布教所がある天理教の場合や、国内最大の教団である創価学会などの場合でも、同様の研究データの蓄積が今後必要となるだろう。

そうした漸減・停滞状況のなかでより焦点化されてくるのが、教団内再生産、すなわち信仰継承・次世代育成といった局面である。新宗教運動において発生から時間が経つにつれ、二代目以降の信者が増えてくるということはしばしば言われてきたことだが<sup>15</sup>、今日ではそれが成員の高齢化と新規信者の獲得の困難性の実質的な増大に伴い、教団の維持・存続上の死活的問題となっている点に重みがある。

この問題については、創価学会における信仰継承・次世代育成についての猪瀬優理の研究が非常に参考になる<sup>16</sup>。猪瀬は、札幌の学会員を対象に質問紙調査を行い、八二二票の有効回答を得た。そのうち、第一世代が四八・五%、第二世代以降が五一・五%であった。入信動機で一番多かったのも「親が学会員」であった。世代間信仰継承の要因と

世代交代の効果についても、男性の場合は「母親の教化態度が弱いほど、父親の信仰態度が強いほど、未来部への参加が多いほど、中学生時の家庭の雰囲気が良い人ほど、高まる」、女性の場合は「母親の信仰態度が強いほど高まるが、母親の教化態度が強いほど弱まる」など、背景的要因の男女差について信頼できるデータをを用いて実証的に解明している。また、家の宗教意識が高まることや二世信者の増加が一概に教団の活力を衰退させるとは言えないことも示しており、巷間に流布する軽薄な創価学会論を一掃するような知見を提出している。本稿の文脈で重要なのは、強固なタテヨコ組織を整えてきたはずの創価学会のさまざまな信仰継承・次世代育成の取り組みを経ても、教勢を伸長させるまでには展開できておらず、「現状維持」が精一杯であるということであろう。

以上、本節では、創価学会をはじめとする「旧」新宗教の多くの教勢が停滞・漸減状況にあること、その背景的要因としての少子高齢化・人口減少・過疎化などの諸問題と、それに対応する信仰継承・次世代育成の問題への着目が、運動自体にとっても学術研究においても焦点化されつつあることを確認してきた。<sup>17)</sup>

## 二、〈新新宗教〉論の提出と展開

続いて本節では、〈新新宗教〉論とその対象について、検討を進める。

「新新宗教」とは、一九七九年に西山茂が、「大教団化した新宗教が社会的適応をとげるさいに、重荷に感じて棄て去った遺物をあえてひろいあげることによって、小規模ながら最近（傍点は筆者による）急速に教勢を伸長させている新宗教<sup>18)</sup>」として提出し、メディアなどを通じてある程度人口に膾炙したチームである。前年の一九七八年には、『国際宗教ニューズ』一六三・四号が特集「新しい新宗教運動」を組み、G L A、真光、ヤマギシ会、エホバの証人につ

いての論考が掲載されていることを考えると、「新宗教運動のなかに何かしら新しいものが出現しているらしい」という感触はある程度共有されていたのかもしれない。西山は当初、その下位類型として、①終末論的な根本主義をかかげるセクト的なものと、②呪術色の濃い神秘主義を標榜するカルト的<sup>19)</sup>なもの二つを挙げ、前者の例として妙信講(現・顕正会)、エホバの証人、統一教会を、後者の例としてG L A、神霊教、真光を挙げていた。もともと西山は、後には②のタイプのみに限定するかたちで論の修整を行い、さらには「(霊||術)系新宗教」論へと展開をはかった。<sup>20)</sup>これは、「神霊・人間霊・動物霊とその構成素・作用などを操作し、それらの実在を「証明」したり、病氣治しなどの除災招福をはかったりする反復的な霊術を、救済や布教の主要な武器とする新宗教」のことであり、こうした新宗教(大本・太霊道、阿含宗・真光・G L Aなど)が日本の近代化の一段落期に台頭するという「時代社会論」としての性格を強く持っていた。

こうした議論は、本稿冒頭で述べた西山執筆の『新宗教事典』の通史的記述の部分にも反映され、八〇年代後半の状況が、「新宗教のレベルにおける神秘・呪術ブーム」であり、そこでは「伝統的な素材と現代的な素材を結びつけてシンクレティックな新しい創造」がなされていること、霊術を使って何かを目指すというよりは神秘性そのものが重視されるという「表出的な宗教志向性」を持つこと、そこには相対的に多くの若者が参集していることなどが指摘された。<sup>21)</sup>

このようにして、日本の新宗教運動のなかの同時代的な新たな潮流をつかもうとする概念として〈新新宗教〉論は提示された。だがしかし、西山自身はこうした時代社会論の拡散を繰り返したものの、そこで挙げられた諸宗教運動の個別研究をその後、に精力的に進めたわけではなかった。<sup>22)</sup>

〈新新宗教〉論をより展開させたのは、島蘭進である。島蘭は「新新宗教」を「一九七〇年代・八〇年代に顕著な

発展、成長をとげた新宗教教団（運動）などと大づかみに捉え、その特色を検討している。具体的には、その主なものとして二七教団ほどを挙げた（後掲表2を参照）。そして、それらを組織の緊密度合などを指標として、「個人参加型」（サークル的）・「隔離型」（緊密・内閉的）・「中間型」に分類した。また、「旧」新宗教と対比させるかたちで、①貧病争という動機から「空しさ」の動機へ、②現世志向から現世離脱へ、③心なおしの脱倫理化と心理統御技法の増加、④神秘現象と心身変容への関心の増大、⑤自己責任の強調、および自己の靈魂の永続の意識、⑥聖なる宇宙の再構成、⑦破局切迫の意識（千年王国主義）とメシアニズムの昂揚という、七特徴を挙げて分析を行った。西山と同様、ある時代における新宗教運動のまとまった動向をパノラマ的に捉えようという姿勢が顕著である。<sup>24</sup>

こうして提示され展開された〈新新宗教〉論とその語は、単に宗教研究の領域のみに留まらず、メディア等を介してある程度人口に膾炙されていくこととなった。いくつか代表的な書とそこで取り上げられた教団名を列挙すれば、朝日新聞社会部『現代の小さな神々』（靈波之光教会・大山祇命神示教会・太陽を信じるピラミッドの会など）、ひろたみを『につぼん新・新宗教事情』（太陽を信じるピラミッドの会・日本ラエリアンムーブメント・日本聖道教団・ものみの塔聖書冊子協会・大和之宮・白光真宏会・阿含宗・世界真光文明教団など）、室生忠『若者はなぜ新・新宗教に走るか』（ものみの塔聖書冊子協会・ラジニーシ瞑想センター・阿含宗・浄土真宗親鸞会）、室生忠『新人類と宗教―若者はなぜ新・新宗教に走るのか―』（世界真光文明教団・日本ラエリアンムーブメント・高千穂神霊教団・太陽を信じるピラミッドの会など）、別冊宝島『救い』の正体。―ポスト・オウムの新・新宗教&カルト全書―（浄土真宗親鸞会・エホバの証人・法の華三法行・統一教会・顕正会など）といった書が、それぞれ「新新宗教」の語を携えて論じている。<sup>25</sup> また、『新宗教時代』一〜五も、必ずしも「新新宗教」という語は使われていないものの、内容としては新宗教のなかの新たな目立つ教団を扱ったものである。<sup>26</sup> なお、新聞・雑誌においても、一九八〇・九〇年代を中心に複

数使われているのが確認できる。<sup>27)</sup>

このように、「新新宗教」の語はメディアを中心に膾炙されていったと言えるが、他方で新しいもの、ものめずらしいものであれば何でも含みこんでしまうようなチームにもなってしまった。

こうした状況を踏まえてその概念と用法の妥当性について批判的検討を加えたのが、井上順孝である。すでに、「新機種まがい」「本当に胎動か」と慎重姿勢を見せていた井上は、「新新宗教概念は必要か」と西山・島蘭らに投げかけ、「運動の個性、及び発展段階の考慮」の必要性などを問うた。<sup>28)</sup> それに対し、西山はあくまで「時代社会論」であると、島蘭は「現代日本の宗教状況の分析道具」だとそれぞれ反論した。<sup>29)</sup> よくかみ合った継続性のある議論とは必ずしも言えないものの、三者とも研究蓄積の必要性についてはある程度共有していたものと言える。

その後、井上は、当該文化の宗教伝統との連続性が稀薄だとする「ハイパー宗教」概念を代案的に提出し、さらには新宗教を「近代新宗教」と「ポスト近代新宗教」（とそのハイパー性）とに分けて考える議論を示している。<sup>30)</sup> その点では、井上においても、何らかの「区切り」を見ようという姿勢は共通していると言えるだろう。

他方、島蘭は、井上との議論を踏まえた上で『ポストモダンの新宗教』論を展開し、「各時期に顕著に発展した教団をその時代を代表する宗教運動とする見方が適切」「七〇年代以降、すなわちポストモダンの意識が高まるようになった時代（に発展）」「それまでの新宗教のあり方と）かなり顕著な差がある」と、基本的には自説を堅持し、その有効性を訴えた。<sup>31)</sup> そして、前掲の三類型・七特徴はそのままに、「反世俗主義」「ナシヨナリズム」「新霊性運動」「近代批判」「内閉化」といった参照軸と組み合わせ、オウム真理教、ワールドメイト、GLA、幸福の科学といった運動群についての考察を展開している。

このように、日本における「新たな新宗教運動」の動向を捉えようとする議論が展開されてきた経緯がある。

### 三、「新新宗教」とその研究のその後の展開

では、一九七九年の概念提示から三五年超、島蘭の概観的研究からも一五年を経た現在、〈新新宗教〉論ならびに、そこで名宛られたそれぞれの運動はどうなっているのか。それが問題である。当時において「最近」「新しい」「その時代」などとされた運動群とその研究の現状の把握が必要なのである。

まずもって、今日ではそれほど積極的かつ頻繁にこのチームが用いられるわけではない。学術論文等を検索してみても、ほとんどヒットしない。筆者自身も、拙稿の表題にて「新新宗教」という語自体は使っているものの、これは、かつてそのように括られた運動群の個別性や現況に焦点化しようとしたものであり、あくまで留保・括弧付きである。では、「新新宗教」とされた運動群の研究は進んだか、という点を確認してみよう（表2）。

ここで挙げられている二八教団は、島蘭進が新新宗教の代表的教団として挙げたものである。今日の観点から振り返ってみても、なかには戦前や高度経済成長期に立教したのも多く含まれ、いくら発展の面を見てもはたして「新新宗教」と一括りにできるものだったのかという疑問がやはりある。

一見してわかるのは、教団・団体ごとに研究の偏りがかなり顕著であることだ。「新新宗教の御三家」とも目されることもあった、阿含宗・G L A・真光をまず見ると、世界真光文明教団・崇教真光については、外国人研究者によるものも含めて継続的な注視と成果の産出がなされてきたと言えようが、阿含宗・G L Aに関してはまとまったものはほぼない。「新新宗教の第二波」と目されたものでは、オウム真理教については、事件後にさまざまな論考が溢れたのは当然だが、基礎研究が提出されたのは比較的近年である。近年注目を浴びることの多いワールドメイトについては、ジャーナリストによる断続的な報告が主であり、その教団特性を包括的に捉えうるような研究は進められていない。

表2 「新新宗教」とされた28教団の設立年・発生基盤・主要研究等

教団名	設立年	発生基盤	主要研究等 <sup>(34)</sup>
エホバの証人	1881	外来キリスト教系	[大泉 1995] [兼子 1999] ほか <sup>(35)</sup>
真如苑	1936	真言密教系	[秋庭・川端 2004] [芳賀・菊池 2007] ほか <sup>(36)</sup>
顕正会	1942	日蓮正宗系	[西山 1978a, b] [早坂 2000] ほか <sup>(37)</sup>
大山祇命神示教会	1953	創唱系	[神奈川新聞社編著 1986] [沼田 1995] <sup>(38)</sup>
霊法会	1950	霊友会系	————
白光真宏会	1951	大本・生長の家系	[Pye 1994] [沼田 1995] [熊田 1999] [岡本 2012] ほか <sup>(39)</sup>
ヤマギシ会	1953	(農業コミュニオン)	[米本 1997] [黒田 2006] ほか <sup>(40)</sup>
阿含宗	1954	密教系	[Reader 1988] [小林 1994] <sup>(41)</sup>
霊波之光教会	1954	創唱系	[塚田 2007a, b] <sup>(42)</sup>
浄土真宗親鸞会	1958	浄土真宗系	[横山 1997] [森 2002] ほか <sup>(43)</sup>
統一教会	1954	外来キリスト教系	[櫻井・中西 2010] ほか <sup>(44)</sup>
世界真光文明教団	1959	世界救世教系	[ペトロ・畑中編 1993] [宮永 1980, 1989, 2000] ほか <sup>(45)</sup>
崇教真光	1978	世界救世教系	[谷 1993] [McVeigh 1997] ほか <sup>(46)</sup>
自然の泉	1960	創唱系	————
ほんぶしん	1961	天理教系	[新屋・島蘭・田邊・弓山編著 1995] <sup>(47)</sup>
GLA	1969	スピリチュアリズム系	[沼田 1995] ほか <sup>(48)</sup>
神慈秀明会	1970	世界救世教系	[清水 1994] <sup>(49)</sup>
龍泉	1972	沖縄民俗宗教系	[藤田 1995] [島村 1995] <sup>(50)</sup>
ラジニーシ瞑想センター	1974	外来インド系	[伊藤 2003] <sup>(51)</sup>
日本聖道教団	1974	創唱系	[清水 1995] <sup>(52)</sup>
ESP 科学研究所	1975	(健康器具等会社)	[沼田 1995] <sup>(53)</sup>
法の華三法行	1980	自然の泉系	[米本 2000] [藤田 2008] <sup>(54)</sup>
ス光光波世界神団	1980	真光系	[米山 1995] <sup>(55)</sup>
日本ラエリアン・ムーブメント	1980	外来系	[室生 1986] [ひろた 1988] <sup>(56)</sup>
大和之宮	1977	創唱系	[井上 1994] <sup>(57)</sup>
オウム真理教	1984	ハイパー系	[島蘭 1997] [宗教情報リサーチセンター編 2011, 2015] ほか <sup>(58)</sup>
ワールドメイト	1984	大本・世界救世教系	[溝口 1995] [沼田 1995] [青沼 2015] <sup>(59)</sup>
幸福の科学	1986	GLA・スピリチュアリズム系	[島蘭 2001] [塚田 2009, 2015] ほか <sup>(60)</sup>

※島蘭進『ポストモダンの新宗教』で挙げられた28教団<sup>(61)</sup>について筆者作成

幸福の科学については、一九九〇年代初頭の単発的な論考提出後は、ようやく近年になって筆者によりまとまった成果が提出されたような状況である。そのほか、白光真宏会も包括的なものはないが、単発的な論文のかたちでは提出されている。真如苑については、二〇〇〇年代に入ってからまとまった成果が提出され、その研究水準は大きく上がった。霊波之光教会についても、筆者による論考がほぼ唯一のものだ。統一教会については、主に「カルト問題」研究の文脈などから、ようやく重厚な研究が切り開かれた。比較的規模の大きい団体と言える、大山祇命神示教会や神慈秀明会、社会問題化することも見られる顕正会や浄土真宗親鸞会、法の華三法行についての研究の蓄積はほとんどない。それ以外でも、単発的あるいは一九九五年ごろのルポルタージュのみで停滞しているものもかなりあるのである。こうした教団ごとの注視のムラと包括的なデータ蓄積の不足という現状を、まずは認めなくてはならないだろう。

そのような現状認識を前提としつつも、それでも次に考えたいのは、これらのひとまずは「新新宗教」として把握された教団群が、その後どのように展開し、現在どのような状態にあるのか、ということである。すなわち、「新新宗教」は「新新宗教」のままであるのか、それともそうではなくなつたのかという点であり、ひいては〈新新宗教〉論が適切であったか、その今日的有効性はあるのかどうかという点である。全ての教団について十全な調査をしたわけではないが、なるべく包括的な把握と、共通性・特筆性をそなえる論点の提示を目指したい。

まずは、「旧」新宗教との平準化という点である。日本の新宗教運動の諸特徴をやや強引に約言するならば、民俗宗教との連続性、根源的生命との連続性の教え、現世主義、在家主義、問題解決を求めての入信、家族信仰、倫理的実践と呪術的実践、自力と他力、自利と利他の連結、組織宗教性、教団施設の整備と全国的な展開、などとまとめることができよう。<sup>(8)</sup>

そうすると、「新新宗教」のなかでも真如苑、大山祇命神示教会、霊波之光教会、世界真光文明教団、宗教真光など

は、全国化、家族での信仰化、教え・儀礼・施設の整備などが進み、組織面ではまず「旧」新宗教とあまり変わらない中堅教団に展開していることが言えよう。白光真宏会、阿含宗なども、やや緩やかな組織性を持つものの同様の傾向にある。真如苑は表2の諸教団のなかでも群を抜いて着実に教勢を拡大しており、それに次ぐと思われるのが靈波之光教会や大山祇命神示教会で、地方施設等の拡充は確実に見られている。これらの多くは、島蘭によれば「中間型」に分類されるものであるので、そもそもの組織的特性として、「旧」新宗教とそれほど差異がなかったのかもしれない。「個人参加型」とされたもののなかでも、幸福の科学やワールドメイトなどは、その実態規模はたいしたことななくとも、全国的な展開や組織整備等の傾向は同様である。すなわち、これは発生当初は緩やかな組織の個人参加型に見えたとしても、運動の展開とともにやはり組織性を求めていったと行うことができ、新旧の差異に見えたのは運動の発展段階に抛る面があったのではないかということである。

世界観や教えなどの特性に目を向けても、かつて指摘されたような、霊的な興味本位志向、若者中心性、島蘭が指摘した七つの特性などといった顕著な質的差異を現在認めることができるだろうか。例えば今日の真光教団に、手かざしの神秘性や霊動・憑依それ自体を求めて参画を目指す若者が多いとは言えない。教団側もそのような打ち出しは特にしていない。阿含宗の月例祭や教団行事に若者の姿が多く見られるわけではないし、超能力開発が強く求められ、教団がそれに積極的に答えるわけでもない。幸福の科学は確かに霊的志向が強く、メディアの活用などを通して若者に訴えかける戦略を打ち出しているが、それでも教勢として成功しているわけではない。多くの教団は組織戦略として信仰継承・次世代育成に注力しており、その姿は「旧」新宗教と大きくは変わらない。その意味では、「新新宗教」ですら多くは停滞・漸減傾向にあるのである。

次に、「シンクレティックな新しい世界観の創造」「霊的世界観の再構成」などと捉えられた面についてである。前

掲表2の通り、多くの「新新宗教」は、「旧」新宗教と同様に、既成宗教・民俗宗教を基盤としつつ、先行する新宗教運動などからの影響を色濃く受けている事実を確認できる（外来系を除く）。そこに新旧の差異を認めることはほとんどできない。ただし、オウム真理教や幸福の科学などいくつかの教団は、確かにグローバル化の潮流を受けた、井上が述べるところの「ハイパー性」をそなえており異彩を放っている<sup>(64)</sup>。よって、井上が「近代新宗教」と「ポスト近代新宗教」との間に質的差異を措定するのは適当と言える。しかし、そうした運動群が急速に教勢を伸長させたり、質量ともに目立っているとは言えず、「新新宗教」とされたものなかではあくまで一角である<sup>(65)</sup>。これは、こうした「ハイパー宗教」という形態の捉えにくさと「新宗教運動」という形態との相性の問題を孕んでいるが、それは次節で論じたい。

続いて、やや議論の位相が異なるが、「カルト問題」や社会問題化との関連、という観点である。島蘭が一九九二年時点で「隔離型」と分類したものを中心に、複数教団がいわゆる「カルト問題」化し、実際にさまざまな被害を生んでいたという事実をどう考えたらよいのだろうか。筆者は、オウム真理教・統一教会・親鸞会・顕正会・法の華・ワールドメイト・幸福の科学などのケースを論じるなかで、そうした社会問題化の原因を（複合的ではあるものの）、「後発の新宗教であること」により、新規開拓の厳しさやオウム事件の影響による教団宗教への忌避感を正面から受けることで、社会問題化を惹起するような布教・運動形態の形成・採用の方向に向かったのではないかと一点を示唆した<sup>(66)</sup>。ただし、「後発」ゆえの問題性であるので、時間が経てば自然と問題性がなくなる、という見通しは甘い。現に、発生から三〇年以上経っても、社会のあちこちで軋みを抱えているケースは複数かつ顕著なのであり、そうすると発生時期や発達段階の問題としてのみ考えることはできないだろう。これは新旧の差異というよりも、その問題性の有無という質的差異に厳しく目を見張るべき観点だと言えよう。

以上のように、かつて「新新宗教」とされた教団群の時を経た今日的状況を踏まえれば、〈新新宗教〉論はかなりの動揺をむかえていることは明らかである。ある時代のある動向を、まさに西山の言うように「時代社会論」的に切り取り、論じることはできる、あるいはできただろうが、そのままでははや通用しない。その運動群は、中堅教団に発展しつつ新宗教全体の一部に同化・融解していったものも複数あり、当初は注目を浴びたものの、多くは停滞・漸減状況にある。日本の新宗教の通史的記述の「その後」（一九九〇年代以降）を記すとしても、「世代交代」「新勢力への力の移行」とは言えず、「新新宗教」を「主役」のように記述することはとてもできないのである。

#### 四、新たな運動の発生・伸長とその把握

「新新宗教」が「主役」の座への世代交代に「失敗」したとして、では代わりに（冗談ではなく）「新新新宗教」とでも言えるような、二〇〇〇年代を中心に著しく発生・伸長した新たなタイプの新宗教運動の一群が存在しており、それについての議論や歴史を記すことができるのだろうか。ところが結論から言うならば、それもまた難しい。まず、そのためのデータの蓄積が研究レベルにおいてもまたジャーナリズムレベルにおいても圧倒的に乏しい。また、このことを論じるにも、①そもそも「新たな新宗教」と言えるような運動が発生しているのかどうか、②その運動形態の特性上、それらを「宗教運動」と捉えることができにくいのではないか、③研究者やメディアなどがそうした新たな運動を把握しようというモチベーションが低下しているのではないか、といったように順序立てて論じていく必要がある。

まず、そもそも「新たな新宗教」と言える運動が発生しているのか、という点である。「宗教法人」は認証制なので、

実数レベルでおさえられる。新たな設立認証は、ここ一〇年は年間七〇〜一一〇件ほどで推移している。<sup>67</sup> には単立の神社、寺院、キリスト教会なども含まれている。文部科学大臣所轄、すなわち複数県で活動するある程度全国的な宗教法人の新設は、年間わずか二〜三件である。『宗教年鑑』の二〇一四年版では、日本テラワダ仏教協会（仏教系単立）、法蘭西（仏教系単立）、宮崎北聖書キリスト教会、純福音教団、IGLESIA NI CRISTO、麻布福音協会（いずれもキリスト教系単立）などが新たに文科相所轄になっているのを確認できる。<sup>68</sup> しかし、このやり方で新たな「新宗教」の目立った発生や急激な台頭・発展を捉えることは難しい。

「新新宗教」以降で、『新宗教事典』や『新宗教教団・人物事典』には掲載されていないが、新宗教的運動と見なせるものがないわけではない。いくつか試みに挙げてみよう。<sup>69</sup>

念佛宗三寶山無量壽寺は、一九七九年に宗教法人格を取得しており、一定の歴史を有するが、近年注目を浴びてきている。<sup>70</sup> 兵庫県加東市に広大な本山をかまえ、日本仏教の「代表」として「仏教サミット」を開催するなど独自の活動が目をはひく。秘密念仏系の加入儀礼などにより実業家や富裕層を集め、数万人超の規模と見られる。

木の花ファミリーは、一九九四年に設立された農事組合法人である。<sup>71</sup> 教祖的人物である「いざどん」を中心にして、富士山麓で数十人規模のエコ・コミュニティを展開している。「いざどん」にはシャーマニズム的力能があるとされ、さまざまなメッセージなども伝えられている。また、ヤマギシズムとの連携も見られる。

レムリア・ルネッサンスは、一九九八年設立の一般財団法人である。<sup>72</sup> 元々は幸福の科学の分派的団体であり、GLAの影響も受けている。幸福の科学と同様に、高級霊や歴史的偉人などのスピリチュアル・メッセージを取り次ぎ、書籍・CDなどの出版やセミナー活動を行っている。

かむながらのみちは、一九九九設立の宗教法人である。<sup>73</sup> 解脱会の会員であった北川慈敬を中心に、真言宗醍醐派の

伝統や、あるいは自己啓発セミナーなどとも連携しながら宗教活動を行っている。また、禊教の流れをくむ身曾岐神社（山梨県北杜市）の実質的な運営を担っている。

につぼん文明研究所は、二〇〇〇年に設立されたNPO法人である。<sup>74</sup> 神職である奈良泰秀を中心に、大本にも連なる古神道系思想や儀礼を講座・講演などで啓蒙する。

日像会（神幽現救世日像会）は、二〇〇四年に設立された宗教法人である。<sup>75</sup> 元々は世界真光文明教団から一九七四年に分派した神幽現救世真光文明教団から、その教祖・依田君美の死後に分派した、自らを日像の生まれ変わりとする福島政浩によるものである。設立後、スピリチュアルな要素が増し、現在はセミナー・講演会などを中心に活動を展開している。

これらの団体は、筆者が調査・研究を進めるなかで、従来の新宗教運動との何らかの連続面などからたまたま発見し認知するに至ったものであって、何らかの体系性を持って挙げたものではない。しかし、『新宗教事典』以降、「新宗教」以降の新たな運動という観点からは、ある程度の広がりを確認できる諸事例ということができらる。こうした団体は、他にも探せばいくらかはあると思われるが、<sup>76</sup> 重要なのはそもそもほとんど探されていないこと、把握されていないことであろう。

これらの例から読み取ることができなのが、その拡散的な運動形態上、それらを「宗教運動」と捉えることができにくいのではないか、という点である。前述の木の花ファミリアやレムリア・ルネッサンス、につぼん文明研究所などは、観察者が宗教的団体あるいは「新宗教運動」だと解釈することは可能だとしても、少なくとも「宗教団体」を自称してはならず、「宗教法人」の形態もとっていない。裏を返せば、法人格なしのスピリチュアル・グループ、一般財団法人、NPO法人、有限会社、修養・倫理団体<sup>77</sup>などのなかに、そうした団体はそれこそ無数にあるのではないか、

ということだ。

このことは、〈新新宗教〉論のなかでも出てきた「個人参加型」や、いわゆる拡散・遍在化する宗教性の問題とも連結する。また島蘭進は、緩やかなネットワーク形態を取る「業務遂行組織―消費者接合モデル」も提出していた。<sup>28)</sup>「新新宗教」のなかにもESP研究所など「宗教団体」ではない例がすでに含まれていたが、その傾向はより顕著になっているのではないか。言うなれば、かつてはある宗教的・精神的ネットワークなり萌芽的組織がさらに組織化を模索する過程で有力な選択肢としてあった宗教団体化・宗教法人化という途が、あまり選択されにくくなっているのではないかということである。オウム真理教事件を経た九〇年代以降、いっそうその傾向は強まったのではないかと思われる。

一方、この変化は観察者側にとっても重い意味を持つ。かつては、「宗教（団体・法人）」のなかに「新新宗教運動」を見る、という基本的括りのもとで発見・収集・観察することが担保されていた。しかし、このように「宗教」の境界をはみ出して、際限がないほどに拡散してしまったものを、はたしてどこまで集められるのか、集める研究上の意義があるのだろうか。そして、それをたとえ集めたとしても、まとまりをもって捉え、論じられるのか、という事態である。これは、宗教の機能的定義を採用した際につきまとう問題ともパラレルである。<sup>29)</sup>そういった作業に従事するモチベーションも低下せざるをえないだろう。

メディアにおける関心の低下もまた顕著である。今日において、かつての『現代の小さな神々』<sup>30)</sup>のような新たな宗教運動等への継続的な関心と報道はほとんど期待できにくい。全国紙・地方紙ともに宗教取材班どころか宗教報道専門の記者も若干の貴重な例外を除いていないと言ってよい状況である。また、そもそもそうした「新たな新宗教」のような対象に対する社会的な興味・関心もあまり高いとは言えないだろう。企画として成立しがたいのであり、せい

ぜい何かのきっかけに「カルト問題」化・事件化して初めて一時的な注目を浴びる程度である。確かに週刊誌や情報誌等には宗教特集・新宗教特集が載ることもある。近年のものでは例えば、『別冊宝島』二二三〇号（二〇一四年）は「日本の新宗教 保存版 知っておきたい教祖、教え、活動内容」、『一個人』二〇一三年九月号は「保存版特集 日本の新宗教入門」として、それぞれ日本の新宗教運動の特集を組んだ。だが、それらはほとんど「旧」新宗教と一部の「新新宗教」の現状の紹介なのである。その他の雑誌でも断続的に特集などが組まれることはあるが、多くは「これまで」の新宗教のカネやパワーや政治との関わりの「いま」についてであり、あるいは事件化したもの、珍奇さへの着目などに終始している。「いまこうした新たな動きがある」という側面はやはり稀薄なのである。

以上見てきたように、このような実態の不明瞭性、形態の拡散性、関心の停滞などがあいまって、新たな運動の把握はほとんど行われていない。この状況は、今後いくつかの大海に小網を垂らすような把握が進められる可能性はあるものの、大きくは変わらないと思われる。「新新宗教」以降の新たな運動の動向によって、「新宗教運動」史を更新することは、実質的に不可能と言わざるをえない。

##### 五、小括―〈新宗教運動Ⅱ文化〉とその研究の現在地―

以上、一九九〇年の『新宗教事典』刊行以降、〈新新宗教〉論以降の日本の新宗教運動の状況とその研究動向について広く追ってきた。一節では、「旧」新宗教がほぼ軒並み停滞・漸減状況にあることを示し、少子高齢化・過疎化などの影響と、信仰継承・次世代育成の課題化について見た。二節では〈新新宗教〉論の登場と展開を追い、三節ではそこで「新新宗教」とされた運動群とその研究状況の現在を示すことで、その議論の限界点を明らかにした。四節では

さらに「新新宗教」以降の新たな新宗教運動の動向に目を配りつつも、とりわけ宗教性の拡散状況を踏まえ、新たな発生・伸長を体系的に捉えることの困難性について論じた。

「旧」新宗教も「新新宗教」も停滞・漸減状況にあり、他方で新たな新宗教運動の伸長も認めがたい。そうだとすると、そのような現在の状況は悲観すべきことなのだろうか。それは、〈新宗教運動Ⅱ文化〉がその歴史的な意義を終えて、その研究営為もともに衰滅の途を進むことにつながるのだろうか。そうではない。

日本の新宗教運動の多くが停滞・漸減状況にあるからといって、その運動と文化とが直ちに消滅するわけではない。数万〜数十万人規模の教団はいくつもあるものであり、その社会的勢力としての、また日本の宗教文化のなかで占める存在感と活力は依然として小さいものではない。

日本の新宗教運動はかつて、その対象としての「戦略高地性」がうたわれた<sup>81</sup>。近代化への民衆の宗教的世界からの応答たる新宗教運動は、近代化に伴う産業構造の転換、経済成長、人口移動、家族形態の変化、意識の変化などの社会変動・変化の影響を受けやすく、社会―宗教の関係を捉え、考察するのに格好の対象だったからである。確かに新宗教運動は近代化に適合的でありそれとともに伸長してきたが、だからといって近代的成長モデルが適合的でない時代に入ったら途端に見向きもしないでよい対象になるとはならないだろう。継続的な注視が必要である。

歴史的経緯を見れば、新宗教運動には独特の「たくましき」があると言つてよい。「生き残る力」と言い換えてもよいだろう。監視や弾圧のなかさまざまな変節や適応を経て「教派神道」として戦前期を生き抜いた天理教や金光教。戦前の苛烈な弾圧にも決して消滅することなく、戦後復興を遂げた創価（教育）学会や大本、ひとのみち教団（PL 教団）。海外でもいくつもの教団が、移民社会・非移民社会問わずに想像できないほどの展開を遂げてきた。また、宗教界においてニューメディアやニューテクノロジーを積極的に導入し、自家葉籠中の物として活用してきたのも新宗

教運動であった。

そういった特性を踏まえれば、新宗教運動は、人口減少・少子高齢化・過疎化といった未知の社会変動・環境変化に対しても、予測できないような柔軟な適応を見せる可能性があるに大いにある。そしてその研究とは特殊な一運動内のトピックに留まるものではなく、本稿冒頭で見たような日本の宗教文化のなかで独特の広がりを持つ〈新宗教運動Ⅱ文化〉の位置づけを問うものであり、同時に日本文化のなかでの対象としての「戦略高地性」を問うものでもある。また、組織宗教であるがゆえに、対象範囲を明確化させやすいというメリットもある。〈新宗教運動Ⅱ文化〉の研究には、それだけの可能性がある。

翻って、概念をめぐる議論の位相に目を移せば、まず〈新新宗教〉論については、時を経たことによりかなりの部分の叩き直しが必要なことが明らかとなった。時間とともに、差異と思えたものが同化していったということは、運動の発達段階に左右されていた部分があったということだが、裏を返せば、その時代には時代の宗教性のように見えただものとはいったい何だったのかということも問われないうとらない。今日、特定の運動に対して「新新宗教である」と呼び続けることに意義はほぼ認められないが、概念自体を完全に放擲する必要もまたない。「時代社会論」として、七〇年代オカルトブームや宗教情報ブームなどとの関連で位置づけなおす意義はあるだろう。

次に「新宗教」概念というレベルで言えば、「新新宗教」とされたものの多くが「旧」新宗教とあまり変わらなくなり、他方で必ずしも新たな宗教運動の動向を認めにくい現況は、概念を精緻化するためにはかえって格好の機会と考えることができる。なぜなら、新たな動向によって次々と修正を迫られる必要もないため、一つの「区切り」として「新宗教」の「終わり」までを含めてまとまりをもって検討できるからである。この作業は、新たな動向の有無に慎重に注意を向けつつも、今後深められるべきものである。

まだまだ〈新宗教運動Ⅱ文化〉研究の課題は尽きない<sup>②</sup>。継続的な成果の産出が俟たれる。

付記・本稿は、平成二七年九月六日の日本宗教学会第七四回学術大会（於…創価大学）におけるパネル「新宗教論の再検討―後期近代社会における展開を踏まえて―」において、「運動の発生と展開の現在―〈新新宗教〉論の再検討を通じて―」の題目で報告された内容を下敷きとしている。パネルの他の報告者である寺田喜朗氏・大西克明氏・猪瀬優理氏ならびにコメンテーターの弓山達也氏には、有益な助言をいただいたことを特に記して感謝申し上げる。

(1) 「宗教文化」概念の教育ならびに宗教研究における可能性については、土屋博『宗教文化論の地平―日本社会におけるキリスト教の可能性―』北海道大学出版会、二〇一三年、井上順孝「宗教文化士」制度の発足へ向けて」『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』三、二〇一〇年、二九―三六頁、などを参照。

(2) 西山茂「新宗教の特徴と類型」山下袈裟男監修・東洋大学白山社会学会編『日本社会論の再検討―到達点と課題―』未來社、一九九五年、一四九頁。また、日本の新宗教の概論としては、塚田穂高「新宗教の展開と現状」高橋典史・塚田穂高・岡本亮輔編著『宗教と社会のフロンティア―宗教社会学からみる現代日本―』勁草書房、二〇一二年、二三四―四三頁、を参照。

(3) 全国歴史教育研究協議会編『日本史用語集 A・B 共用』、山川出版社、二〇一四年、二二三頁、三五五頁、を参照。

(4) 五十嵐太郎『新編 新宗教と巨大建築』ちくま学芸文庫、二〇〇七年。

(5) 井上順孝・孝本貢・對馬路人・中牧弘允・西山茂編『新宗教事典』弘文堂、一九九〇年。

- (6) 西山茂「時代ごとの特徴」前掲『新宗教事典』、二二二―三九頁。
- (7) 順序が逆になるが、島蘭進は後述する〈新新宗教〉論のなかで、「新新宗教」が台頭する以前の高度経済成長期までにおおよその伸長・展開を遂げた教団群を「旧」新宗教と呼んでおり、本稿でも便宜上この語を用いる。島蘭進『新新宗教と宗教ブーム』岩波ブックレット、一九九二年。
- (8) 井上順孝・孝本頁・對馬路人・中牧弘允・西山茂編『新宗教教団・人物事典』弘文堂、一九九六年。
- (9) それぞれ、文化庁編『宗教年鑑』の、平成六年版（一九九五年）、平成一一年版（二〇〇〇年）、平成一六年版（二〇〇五年）、平成二一年版（二〇一一年）、平成二六年版（二〇一五年）掲載のデータに基づく。
- (10) 『SOKA GAKKAI ANNUAL REPORT』二〇一〇～二〇一五、創価学会広報室、二〇一〇～二〇一六年。
- (11) 増田寛也編著『地方消滅―東京一極集中が招く人口急減―中公新書、二〇一四年、ほかを参照。
- (12) 日本の宗教界全体を扱ったものとして石井研士「宗教法人と地方の人口減少」『宗務時報』一二〇、二〇一五年、一七―三五頁を、神社神道の状況を扱ったものとして石井研士「神社神道と限界集落化」『神道宗教』二三七、二〇一五年、一―二四頁を、仏教界の状況を扱ったものとして櫻井義秀・川又俊則編『人口減少社会と寺院―ソーシャル・キャピタルの視座から―』法藏館、二〇一六年を、仏教とキリスト教の状況を扱ったものとして川又俊則「人口減少時代の宗教―高齢宗教者と信者の実態を中心に―」『宗務時報』一一八、二〇一四年、一―一八頁、などを参照。
- (13) 以下、渡辺雅子「新宗教における過疎・高齢化の実態とその対応―金光教と立正佼成会を事例として―」『宗務時報』一一七、二〇一四年、一―二六頁、による。他に、アイリーン・バーカー（高橋原訳）「新宗教における高齢化の問題―老後の経験の諸相―」『現代宗教 二〇一四』、二〇一四年、一五九―一九七頁、が共通の問題意識を持つが、これはむしろ前提とされている欧米の「新宗教運動」との差異を自覚するのに有益であろう。

(14) なお、立正佼成会の中央学術研究所は、すでに一九八四年の時点で高齢化問題の重要性を認識し、同会秩父教会会員で六五歳以上の世帯を対象に有効回答数六二四票の調査を実施している。『高齢者会員と世帯に関する研究―立正佼成会秩父教会における実証研究―調査報告書資料編(集計表)』中央学術研究所、一九八四年、ならびに『高齢者会員と世帯に関する研究―立正佼成会秩父教会における高齢者会員世帯の調査結果の概要―』中央学術研究所、一九八五年。また、澤田晃成「会員の高齢者世帯の生活とニーズに関する一考察―秩父教会の高齢者会員とその世帯の場合―」『中央学術研究所紀要』一四、一九八五年、三三三―三二頁、も参照。

(15) 渡辺雅子「入信の動機と過程」前掲『新宗教事典』、二〇二―二〇九頁。信仰継承の問題を扱ったものとしては、『会員世帯の世帯構成と信仰継承に関する実証的研究―立正佼成会岡崎教会における配票調査と結果の分析―』中央学術研究所、一九八二年、谷富夫「新宗教青年層における呪術性と共同性―宗教真光を事例として―」『アカデミア人文・社会科学編』五七、一九九三年、一四九―二七一頁、渡辺雅子「新宗教における世代間信仰継承―妙智會教団山形教会の事例―」『明治学院大学社会学部付属研究所年報』三三、二〇〇三年、一二一―一三五頁、拙稿「2世信者」の信仰形成の過程と教団外他者」川又俊則・寺田喜朗・武井順介編著『ライフヒストリーの宗教社会学―紡がれる信仰と人生―』ハーベスト社、二〇〇六年、八二―一〇四頁、弓山達也責任編集・財団法人国際宗教研究所編『現代における宗教者の育成』大正大学出版会、二〇〇六年、などを参照。

(16) 以下、猪瀬優理『信仰はどのように継承されるか―創価学会にみる次世代育成―』北海道大学出版会、二〇一一年、に基づく。また、猪瀬優理「教団の維持・存続と少子高齢社会―信仰継承に着目して―」『現代宗教 二〇一四』、二〇一四年、一三九―一五八頁、も参照。

(17) 新宗教研究の議論の焦点を発生論から変容／継承論へとシフトすべきだという論点の提示は、寺田喜朗・塚田穂

- 高「教団類型論再考―新宗教運動の類型論と運動論の架橋のための一試論―」『白山人類学』一〇、二〇〇七年、一―二〇頁、を参照。なお、「旧」新宗教に関する研究成果がそれ以外に提出されてこなかったわけではない。二〇〇〇年代に入ってから、渡辺雅子『ブラジル日系新宗教の展開―異文化布教の課題と実践―』東信堂、二〇〇一年、渡辺雅子『現代日本新宗教論―入信過程と自己形成の視点から―』御茶の水書房、二〇〇七年、ランジヤナ・ムコパディヤヤー『日本の社会参加仏教―法音寺と立正佼成会の社会活動と社会倫理―』東信堂、二〇〇五年、寺田喜朗『旧植民地における日系新宗教の受容―台湾生長の家のモノグラフ―』ハーベスト社、二〇〇九年、大西克明『本門佛立講と創価学会の社会学的研究―宗教的排他性と現世主義―』論創社、二〇〇九年、永岡崇『新宗教と総力戦―教祖以後を生きる―』名古屋大学出版会、二〇一五年、などが続いている。
- (18) 西山茂「新宗教の現況―「脱近代化」にむけた意識変動の視座から―」『歴史公論』五七、一九七九年、三三―三七頁。
- (19) ここである「カルト」とは、今日において膾炙された「反社会的な問題視された宗教運動」ではなく、カリスマ的リーダーを中心とする呪術的な萌芽的宗教集団の意である。
- (20) 西山茂「戦後新宗教の変容と新新宗教の台頭」『宗務時報』七三、一九八六年、一―二頁、にて議論を修正し、西山茂「霊術系新宗教の台頭と二つの「近代化」」『國學院大學日本文化研究所紀要』六一、一九八八年、八五―一五頁、ならびに西山茂「現代の宗教運動―〈霊術〉系新宗教の流行と二つの近代化―」大村英昭・西山茂編『現代人の宗教』有斐閣Sシリーズ、一九八八年、一六九―二〇〇頁、において〈霊術〉系新宗教論を提示した。
- (21) 西山前掲「時代ごとの特徴」、三六―三九頁、西山前掲「現代の宗教運動」。
- (22) 西山は妙信講Ⅱ顕正会を正面から研究した数少ない存在だが、それらの研究は〈新新宗教〉論以前に提出された

ものである。西山茂「教義解釈の変更をめぐる一仏教教団の葛藤過程―日蓮正宗における妙信講問題の事例―」桜井徳太郎編『日本宗教の複合的構造』弘文堂、一九七八年、三八三―四一六頁、ならびに西山茂「少数派講中の分派過程―日蓮正宗妙信講の事例―」宗教社会学研究会編集委員会編『現代宗教への視角』雄山閣出版、一九七八年、一一二―一二八頁。なお、西山自身の〈新新宗教〉論に対する回顧的総括は、西山茂「新新宗教」と「内棲宗教」『国際宗教研究所ニュースレター』七五、二〇一二年、二九―三二頁。

(23) 島菌進『現代救済宗教論』青弓社、一九九二年、ならびに島菌前掲書『新新宗教と宗教ブーム』。

(24) 他に、沼田健哉は、G L A・エホバの証人・E S P科学研究所・白光真宏会・幸福の科学・コスモメイト・大山祇命神示教会・真如苑などの幅広い研究を行った。沼田健哉『現代日本の新宗教―情報化社会における神々の再生―』創元社、一九八八年、ならびに沼田健哉『宗教と科学のネオパラダイム―新新宗教を中心として―』創元社、一九九五年。だが、それぞれの基礎情報を羅列的に記述するというスタイルに終始しており、議論としての参照力は必ずしも高いとはいえない。

(25) 朝日新聞社会部『現代の小さな神々』朝日新聞社、一九八四年、ひろたみを『につほん新・新宗教事情』日本文芸社、一九八八年、室生忠『若者はなぜ新・新宗教に走るのか』時の経済社、一九八四年、室生忠『新人類と宗教―若者はなぜ新・新宗教に走るのか―』三二書房、一九八六年、『救い』の正体。―ポスト・オウムの新・新宗教&カルト全書―(別冊宝島四六二) 宝島社、一九九九年。

(26) 清水雅人編『新宗教時代』一―五、大蔵出版、一九九四―一九九七年。

(27) 朝日新聞記事データベース「聞蔵Ⅱビジュアル」で、「新・新宗教」二五件(初出は一九八四年)。毎日新聞記事データベース「毎索」で、「新新宗教」二一件(初出は一九九一年)。読売新聞記事データベース「ヨミダス歴史館」

で、「新新宗教」二一件（初出は一九八八件）。大宅壮一文庫データベースで「新新宗教」四五件（初出は一九八六年）。その表記は、「新新宗教」「新・新宗教」「新々宗教」とユレがある。検索はいずれも二〇一六年二月時点。

(28) 井上順孝『新宗教の解説』ちくまライブラリー、一九九二年、などを参照。

(29) 井上順孝「新新宗教」概念の学術的有効性について『宗教と社会』三、一九九七年、三二二四頁。なお、井上は「新宗教という言葉はいつの日か、別の言葉に言い換えられるであろう。近代宗教、近代大衆宗教運動なども予想されるが、あるいはまったく別の名称になるかもしれない」とも述べていた。井上順孝「未来を予言する」教祖たち―「ポスト新宗教」は胎動しているか―『大航海』一、一九九四年、五六―六六頁。

(30) 西山茂「〔新新宗教〕概念の学術的有効性について」へのリプライ『宗教と社会』三、一九九七年、二五―二九頁、島蘭進「時代の兆候を読みとる―ある時期の運動の集合体を「新新宗教」とよぶ意義―」『宗教と社会』三、一九九七年、三〇―三六頁。

(31) 井上順孝「若者と現代宗教―失われた座標軸―」ちくま新書、一九九九年、ならびに井上順孝「グローバル化時代の近代新宗教とポスト近代新宗教」中牧弘允、ウエンディ・スミス編『グローバル化するアジア系宗教―経営とマーケティング―』東方出版、二〇一二年、四〇五―四一八頁。

(32) 島蘭進『ポストモダンの新宗教―現代日本の精神状況の底流―』東京堂出版、二〇〇一年。他に、島蘭進「新新宗教の勃興」樺山絃一編『新・社会人の基礎知識一〇一』新書館、二〇〇〇年、一六二―一六三頁。

(33) 拙稿「新新宗教における文化的ナシヨナリズムの諸相―真光と幸福の科学における日本・日本人観の論理と変遷―」『宗教と社会』一五、二〇〇九年、六七―九〇頁、ならびに拙稿「偽装・虚勢・無反省―「新新宗教」に蔓延する諸問題―」『中央公論』二〇一四年一月（二五六―）号、二〇一四年、四〇―四七頁。

- (34) 紙幅の都合から網羅的なものとはなっておらず、当該運動について比較的包括的かつ信頼できるデータを含んでいるもので、最も新しいものと筆者が判断しえた論文・論考を挙げている。なお、対象によってはこれ以外にも、カルト問題の脱会者・被害者や被害救済の立場からのまとまった情報発信があるものもあるが、ここでは省略する。
- (35) 大泉実成「エホバの証人（ものみの塔聖書冊子協会）―ハルマゲドンと輸血拒否―」清水雅人編『新宗教時代 四』大蔵出版、一九九五年、五六六頁。兼子一「信者が「世代」を語る時―「エホバの証人」の布教活動に現れたカテゴリー化実践の分析―」『宗教と社会』五、一九九九年、三九五九頁、など。
- (36) 秋庭裕・川端亮『霊能のリァリテイへ―社会学、真如苑に入る―』新曜社、二〇〇四年。芳賀学・菊池裕生『仏のまなざし、読みかえられる自己―回心のミクロ社会学―』ハーベスト社、二〇〇七年、など。
- (37) 西山前掲「教義解釈の変更をめぐる一仏教教団の葛藤過程」。西山前掲「少数派講中の分派過程」。早坂鳳城「顕正会の概要―教義と沿革―」『現代宗教研究』三四、二〇〇〇年、一四〇―一六五頁、など。
- (38) 神奈川新聞社編著『神は降りた―奇跡の新宗教大山祇命神示教会―』神奈川新聞社、一九八六年。沼田前掲書『宗教と科学のネオパラダイム』。
- (39) Pye, Michael. 1994 "National and International Identity in a Japanese Religion." In *Japanese New Religions in the West*, Peter B. Clarke and Jeffrey Somers, eds., pp. 78-88. Sandgate, Folkestone, Kent: Japan Library. 沼田前掲書『宗教と科学のネオパラダイム』。熊田一雄「宗教心理複合運動における医療化の問題―白光真宏会の場合―」『愛知学院大学文学部紀要』二九、一九九九年、一―一〇頁。岡本圭史「信仰を支えるもの―白光真宏会における信者達の実践と語り―」『宗教研究』八六一、二〇一二年、一〇三―一二五頁、など。
- (40) 米本和広『洗脳の楽園―ヤマギシ会という悲劇―』洋泉社、一九九七年。黒田宣代『ヤマギシ会』と家族―近

代化・共同体・現代日本文化―』慧文社、二〇〇六年、など。

(41) Reader. Ian. 1988. "The Rise of a Japanese "New New Religion": Themes in the Development of Agonshu." *Japanese Journal of Religious Studies* 15 (4): 235-261. 小林敬和「阿含宗―阿含経をかかげて環太平洋圏仏教をめざす―」清水雅人編『新宗教時代 二』大蔵出版、一九九四年、六三―一八頁。

(42) 拙稿「霊能の「指導者集中型」宗教運動の展開過程における発達課題―日本の新宗教・霊波之光の事例から―」『東京大学宗教学年報』二四、二〇〇七年、一〇九―一二五頁。拙稿「新宗教運動における指導者の後継者への継承過程―霊波之光の事例から―」『次世代人文社会研究』三、二〇〇七年、三〇七―三二二頁。

(43) 横山真佳「浄土真宗親鸞会―北陸生まれのラディカル仏教教団―」出口三平・横山真佳・溝口敦『新宗教時代 一』大蔵出版、一九九七年、一七九―二二〇頁。森葉月「真宗ファンダメンタリズムの台頭」宮永國子編著『グローバル化とアイデンティティ・クライシス』明石書店、二〇〇二年、一四―一五七頁、など。

(44) 櫻井義秀・中西尋子『統一教会―日本宣教の戦略と韓日祝福―』北海道大学出版会、二〇一〇年。

(45) クネヒト・ペトロ、畑中幸子編『伝統をくむ新宗教―真光―』（『アカデミア人文・社会科学編』五七、一九九三年）。宮永國子「現代に生きる憑依と憑抜の論理―世界真光文明教団の場合―」宗教社会学研究会編集委員会編『宗教の意味世界』雄山閣出版、一九八〇年、一一七―一三八頁。宮永國子「必然に閉じ込められた変革―儀礼の強制力に関する一考察―」田辺繁治編著『人類学的認識の冒険―イデオロギーとプラクティス―』同文館出版、一九八九年、二七五―二九九頁。宮永國子『グローバル化とアイデンティティ』世界思想社、二〇〇〇年、など。

(46) 谷前掲「新宗教青年層における呪術性と共同性」。McVeigh, Brian. 1997 *Spirits, Selves, and Subjectivity in a Japanese New Religion: The Cultural Psychology of Belief in Sūkyō Mahikari*. Lewiston, New York: Edwin Mellen

Press、など。

- (47) 新屋重彦・島蘭進・田邊信太郎・弓山達也編著『癒しと和解―現代におけるCAREの諸相―』ハーベスト社、一九九五年。
- (48) 沼田前掲書『宗教と科学のネオパラダイム』、など。
- (49) 清水雅人「神慈秀明会―徹底した明主様信仰と街頭布教―」清水編前掲『新宗教時代 二』、一七七―二二二頁。
- (50) 藤田庄市「いじゅん―沖縄の精神母体から普遍的な世界へ―」清水編前掲『新宗教時代 三』大蔵出版、一九九五年、五一―五二頁。島村恭則「沖縄における民俗宗教と新宗教―龍泉の事例から―」『日本民俗学』二〇四、一九九五年、一三七頁。
- (51) 伊藤雅之『現代社会とスピリチュアリティ―現代人の宗教意識の社会学的研究―』溪水社、二〇〇三年。
- (52) 清水雅人「日本聖道教団―エレパで地球を救う―」清水編前掲『新宗教時代 三』、一九五―二四五頁。
- (53) 沼田前掲書『宗教と科学のネオパラダイム』。
- (54) 米本和広『教祖逮捕―カルトは人を救うか―』宝島社、二〇〇〇年。藤田庄市『宗教事件の内側―精神を呪縛される人びと―』岩波書店、二〇〇八年。
- (55) 米山義男「ス光光波世界神団―スの光と劇画メディア―」清水編前掲『新宗教時代 三』、五三―九五頁。
- (56) 室生前掲書『新人類と宗教』。ひろた前掲書『につぼん新・新宗教事情』。
- (57) 井上前掲『未来を予言する「教祖」たち』、など。
- (58) 島蘭進『現代宗教の可能性―オウム真理教と暴力―』岩波書店、一九九七年。宗教情報リサーチセンター編・井上順孝責任編集『現代宗教の可能性―オウム真理教』春秋社、二〇一一年。宗教情報リサーチセンター編・井上順孝責任編集『情報時代のオウム真理教』春秋社、二〇一一年。宗教情報リサーチセンター編・井上順孝責任編集『情報時代のオウム真理教』春秋社、二〇一一年。宗教情報リサーチセンター編・井上順孝責任編集『情報時代のオウム真理教』春秋社、二〇一一年。

集『オウム真理教』を検証する―そのウチとソトの境界線― 春秋社、二〇一五年、など。

(59) 溝口敦「ワールドメイト―精神産業としての宗教―」清水編前掲『新宗教時代 三』、一六一―一九四頁。沼田前掲書『宗教と科学のネオパラダイム』。青沼陽一郎「新興宗教ワールドメイトと教祖・深見東州」『G2』一八、二〇一五年、一八四―二〇九頁。

(60) 烏蘭前掲書『ポストモダンの新宗教』。拙稿前掲「新新宗教における文化的ナシヨナリズムの諸相」。拙著『宗教と政治の転軸点―保守合同と政教一致の宗教社会学―』花伝社、二〇一五年、など。

(61) 烏蘭前掲書『ポストモダンの新宗教』、一〇―一一頁。

(62) 西山前掲「新宗教の特徴と類型」、拙稿前掲「新宗教の展開と現状」、西山茂「日本の新宗教における自利利他連結転換装置」『東洋学研究』四九、二〇一二年、四九―五九頁。

(63) 表1の「旧」新宗教と同様に、真如苑のここ二〇年間間の申告信者数を追うと、七二二、〇四四人（一九九三年）、七七六、〇七四人（一九九八年）、八二六、四三七人（二〇〇三年）、八七八、六七三人（二〇〇八年）、九一六、二二六人（二〇一三年）であり、着実な伸長を見せている（と申告されている）のがわかる。

(64) 井上前掲書『若者と現代宗教』、井上前掲「グローバル化時代の近代新宗教とポスト近代新宗教」。

(65) ただし、グローバルな動向としてその広がり捉える視点的有効性は認められる。クリストファー・パートリツジ編著（井上順孝監訳、井上順孝・井上まどか・富澤かな・宮坂清訳）『現代世界宗教事典―新宗教、セクト、代替スピリチュアリテイ―』悠書館、二〇〇九（二〇〇四）年。

(66) 拙稿前掲「偽装・虚勢・無反省」。

(67) 『宗教関連統計に関する資料集』文化庁文化庁宗務課、二〇一五年。

- (68) 文化庁編『宗教学鑑 平成二六年版』、二〇一五年。
- (69) 拙稿「戦後形成された新宗教」世界宗教百科事典編集委員会編『世界宗教百科事典』丸善出版、二〇一二年、四〇六―四〇九頁。
- (70) 念佛宗サイト (<http://www.nenbutsumu.or.jp/>)、などを参照。以下、サイトの閲覧は全て二〇一六年二月時点。
- (71) 木の花ファミリーサイト (<https://www.konohana-family.org/>)、などを参照。
- (72) レムリア・ルネッサンスサイト (<http://lmc.cc/>)、拙稿「Webと書籍とブログが取り巻く、現代的「新宗教」(?)」スピリチュアル・グループ・レムリア・ルネッサンスを一事例として―『ラク便り』三五、二〇〇七年、四四―四六頁、などを参照。
- (73) かむながらのみちサイト (<http://www.kannagara.or.jp/>)、などを参照。
- (74) にっぽん文明研究所サイト (<http://www.nippon-bunmei.jp/>)、などを参照。
- (75) 日像会サイト (<http://www.nichijokai.org/>)、などを参照。
- (76) 『新宗教の本―霊能の秘儀と巨大教団の系譜―』(ブックスエソテリカ 四六) 学習研究社、二〇〇八年、などにはそれらの例がいくつか記載されている。
- (77) 「(新たな) ネットワーク・組織は人間を(限りなく)豊かにし高めることを目的とする修養団体・教育団体的な様相を呈すようになるだろう」(三木英『宗教集団の社会学―その類型と変動の理論―』北海道大学出版会、二〇一四年、二二―四頁)。
- (78) 島蘭進「聖の商業化―宗教的奉仕と贈与の変容―」島蘭進・石井研士編『消費される〈宗教〉』春秋社、一九九六年、八八―一〇頁。拡散する宗教性についての島蘭の議論は、島蘭進『精神世界のゆくえ―現代世界と新霊性運

動―』東京堂出版、一九九六年、島蘭進『スピリチュアリティの興隆―新霊性文化とその周辺―』岩波書店、二〇〇七年、などを参照。

(79) 岡本亮輔『社会を読み解くツールとしての宗教社会学』高橋・塚田・岡本編著前掲『宗教と社会のフロンティア』、二六九―二八六頁。

(80) 朝日新聞社会部前掲書『現代の小さな神々』。

(81) 西山茂『研究対象としての新宗教―宗社研の新宗教研究と新宗教の戦略高地性―』宗教社会学研究会編『いま宗教をどうとらえるか』海鳴社、一九九二年、八二―一〇〇頁。

(82) 本稿では日本の新宗教運動に議論を限ったが、現代の伝道熱心な単立系キリスト教会や、韓国系・ブラジル系キリスト教等の移民・ニューカマーの宗教の動向を、新宗教概念や新宗教研究の道具立てと連続性を持つて見ていく必要性もあると考える。李元範・櫻井義秀編著『越境する日韓宗教文化―韓国の日系新宗教 日本の韓流キリスト教―』北海道大学出版会、二〇一一年、三木英・櫻井義秀編著『日本に生きる移民たちの宗教生活―ニューカマーのもたらす宗教多元化―』ミネルヴァ書房、二〇一二年、などを参照。